



✧ 研究会報告 ✧

近現代日本の祭祀空間と海外神社班 2023 年度第 1 回研究会

「久米島字鳥島の七嶽神社について」

日 時：2023 年 5 月 27 日（土）13:30～15:30

開催方法：ハイフレックス（班メンバーはみなとみらいキャンパス 6010 教室、
一般参加は Zoom）

報 告 者：菅 浩二（國學院大學教授、非文字資料研究センター 客員研究員）

上田 由美（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程）

近現代日本の祭祀空間と海外神社班 2023 年度第 1 回研究会は、5 月 27 日 13 時 30 分からみなとみらいキャンパス 6010 教室を会場に開催された。班のメンバーは対面で、一般参加者は Zoom を用いたオンラインの併用で、参加者は 47 人であった。第 1 回の報告は、菅浩二氏の「久米島字鳥島の七嶽神社について」である。沖縄県久米島町字鳥島は、1903（明治 36）年から翌年にかけて、硫黄鳥島から組織的な全島移住により形成された集落である。集落には、硫黄鳥島に存在した七つの御嶽を併せ祀る「七嶽神社」があり、現在に至るまで住民の心の拠り所となっている。報告は、「七嶽神社」の事例を通じて、沖縄における「御嶽」と「神社」、それらをつなぐ祭祀施設について考察するものであった。本稿では、報告に沿って要旨を記したい。

硫黄鳥島について

硫黄鳥島は、沖縄県島尻郡久米島町に属する火山島である。かつては硫黄採掘のために住民がいたが、1959（昭和 34）年の噴火以降は、無人島になった。

琉球国時代は「鳥島」と呼ばれていた。14 世紀には硫黄採掘従事者が居住していた。硫黄は中国への重要な輸出品として那覇港に運ばれ、精錬された。薩摩の琉球侵攻（1609 年）後も、硫黄の進貢貿易を続けるため首里王府領として残された。『琉球国由来記』巻十七（1713 年）には、佐司笠御嶽、エケドン御嶽、若津笠御嶽、赤崎御嶽、ソデタレ御嶽、スズ御嶽、アフリキヨラ御嶽の七つの御嶽名が記されている。『鳥島公事帳』（1763 年）には、徳之島、沖永良部島、今帰仁間切仲宗根、大宜味間切渡野喜屋村四か村からの移住の記述が見られ、のち首里、那覇、糸満村からも移住民があり、嘉永期には配流者も受け入れたという。

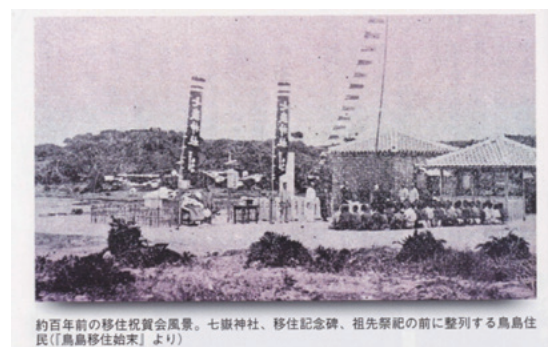
廃藩置県後の硫黄鳥島は、1879（明治 12）年に設置された沖縄県の管轄になった。火山の噴火の危険があり、硫黄採取の費用対効果が少ないことから、県は 1882（明治 15）年に島民の移住を説得するが、拒否された。1888（明治 21）年には、硫黄による現物納税だったのを廃止し、無税化した。度々飢饉にみまわれていた。1896

（明治 29）年には、島尻郡に編入された。当時の「島尻郡鳥島全図実測図」には、集落内に鳥居が四つ見られる。

久米島移住と字鳥島の成立

1903（明治 36）年 3 月、4 月に噴火が起き、5 月に県庁・郡役所、内務省の現地調査が実施された。2 度の町民大会の結果、全島一致で移住が決議された。移住にあたっては、島尻郡長第 11 代齋藤用之助（佐賀出身）が、島民の説得、国庫からの移住補助費拠出の交渉、移住地の決定及び整備などを 9 か月で達成した。1903（明治 36）年 12 月、1904（同 37）年 2 月の 2 回にわたり、残留した硫黄採掘要員 93 人をのぞき、全島 100 戸、528 人の住民が、久米島へ組織的集団移住した。

移住先の鳥島部落は久米島の旧具志川間切太田村仲泊に位置し、現在は久米島町字鳥島である。移住した住民には、国吉、糸数、仲宗根、東江、仲村渠、上間、島袋の七つの姓が多い。久米島の住民は、島への経済効果もあり、移住民受け入れに協力し、歓迎した。近くには、1885（明治 18）年に首里から士族が入植した大原集落という例もあった。字鳥島では、第 2 回移住船到着日 2 月 11 日（日露戦争開戦直後の紀元節）を「移住記念日」として毎年祝った。また、「鳥島移住記念之碑」（齋藤用之助起草）を硫黄鳥島と字鳥島に建立した（以上、『鳥島移住百周年記念誌』2009 年 より）。



第 1 回移住記念式（『鳥島移住始末』より）

七嶽神社について

七嶽神社は、現在久米島町指定史跡とされている。「御嶽」と「神社」をつなぐ位置にある施設のひとつである。硫黄島島の七つの御嶽の砂土をそれぞれ七つの壺



現在の石祠（菅浩二氏撮影）

に納め、移住先集落西南隅に石祠を建てて祀った。1905（明治38）年6月27日に第1回祭礼を実施し、以後2月11日を祭礼日に、現在まで住民の心の拠り所とされた。場所選定の理由については不明である。七嶽神社は法的な「神社」扱いも「宗教」扱いもされていない。祭祀者は、戦前はノロ・ニガミフツ

パ以下全5名、戦後もその後継者はあったが、現在は集落出身神女である。島内祭祀組織との関係については未調査である。

「村は大綱規約」には、「旧鳥島より移住新村に迎へし七嶽神社の鎮座と祖先合祀所の祭礼をなす」という記録がある。神社に隣接して、字単位の合同墓である先祖合祀所（納骨堂）が建てられている。神社の境内には鳥居、村の神や火の神などを祀る祭祀の場（インチャンダナ）、「鳥島移住記念之碑」、「移住百周年記念之碑」及び大正4年に齋藤用之助が奉納した石灯籠などがある。石祠は1956（昭和31）年または1960（昭和35）年に建て替えられている。

令和5年の鳥島移住記念日（2月11日）

現在は、集落単位での拝礼を、移住記念日と鳥島ハリー（旧暦五月四日）の際に実施している。菅氏は、令和5年の記念日前日（10日）・当日（11日）の行事に参加した。前日は、具志川農村環境改善センターで「佐賀と久米島交流コンサート&演劇」が開催され、11代齋藤用之助の出身地佐賀と久米島住民が交流した。記念日当日は、午前中に七嶽神社で神女（国吉和江氏）と鳥島区長（仲宗根弘之氏）による祭祀を実施し、住民一同と第11代の曾孫第14代齋藤氏等が参加した。夜は公民館で、「齋藤用之助物語」、踊り、音楽の余興があった。その後菅氏は改めて3月3日に、鳥島公民館で仲宗根弘之氏と国吉和江氏への聞き取り調査を実施した。

考察：「御嶽」と「神社」をつなぐ位置にある祭祀施設の位置づけ

考察として、いくつかの課題が提示された。

・沖縄近代史「御嶽」の「神社」への「引直シ」の中になんどう位置づけるか。

七嶽神社は、「御嶽」を「神社」へつなぐ祭祀施設で

ある。七嶽神社はなぜ「神社」なのか。「神社」は近代的なものであり、行政用語である。なぜ、新しい村落のあの位置にあるのか。「引直シ」ということで、本土式の神社化は検討されなかったのか。

・ひとびとの団結・連帯の象徴として

大正期の経済不況時の「蘇鉄地獄」で、南洋移民として140世帯以上が島を出た。自分たちの集落の信仰を持って行ったのかどうか。鳥居を建てた意味と、沖縄の鳥居をどう解釈するのか。米統治時代の状況はどうか。佐賀とは、本土復帰をきっかけとして、第14代齋藤氏が第11代の顕彰をするようになり、新たな結びつきが生まれた。現在に至る祭祀運営を知ることが重要である。

・生き続ける信仰 祭祀の変遷を知る必要

鳥島ノロ（国吉ゴセイ氏か）の祈禱録音の所在を確認する必要がある。久米島の祭祀組織との関係はどうか。硫黄島島を、先祖の故地「むとうーい島」として伝承する意識も重要である。

今後の研究として、文化財登録時の記録、久米島出身者の叙述、先行研究の更なる確認など、継続的な調査の必要性を述べて報告が終わった。

意見と質疑応答

次のような事項で、活発な議論が交わされた。

○他地域との比較

・大原集落の例と比較すると面白い。

○御嶽の神社化

・県の政策として御嶽を神社化するという根拠について。移動により作り直した。地縁・血縁で人を結び付けるものを神社に求めた。精神性としては、御嶽が集落の人々の団結になう。明治後期、地域行政と精神性の象徴を求めた。図式的な理解である。

・沖縄の場合、県ではなく内務省。知事は内務官僚である。女性になう宗教側の考えと政治側は異なる。

・東アジア的には神社と御嶽は共通の基盤がある。歴史の中で別の発展をしてきたが、見方によっては同祖論。

○土地所有と神社の位置

・神社の位置としては、例えば満洲開拓の場合は、皆が行ける場所ということで中央に作る。

・硫黄島島の土地の所有権については、戦後も話題になっている。現在は久米島町の管理である。

・沖縄は土地制度が日本と違う。検証する必要がある。

○南洋移民との関係

・南洋移民が祀るのは、神社でなく火の神か。

・火の神は、琉球の民俗宗教。御嶽は国家祭祀、国家行事である。日本の神社より大きい。

・南洋では農場の区画ごとに神社があった。久米島からの移民の神社はどうだったのか。

本稿作成に当たり、菅氏にご助言と図版の提供をいただきました。感謝いたします。